『ICU比較文化』45〔2013〕
Article accepted Nov. 30, 2012

ICU Comparative Culture
No.45 [2013], pp. 61-69

＜研究ノート＞

カトゥルス64番におけるcupidoとその関連語について

山口　京一郎

カトゥルス64番にはcupido（欲望・熱望）(1) とその関連語が8回(2) 登場する。それぞれを概観した後、特にfides（信義）、foedus（誓約）、iustitia（正義）、pietas（敬虔）(3) との関連で、欲望・熱望を抱く者の行動とその破滅ないし幸福に、64番全体の構成(4) にも呼応するパターンが見られることを指摘する。

I. 8つのcupidoおよび関連語

l.86 cupido

アリアドネの回想中、彼女とテセウスの出会ったとき、アリアドネはテセウスを「熱望の目（cupido ... lumine (l.86)）」で捉えた。この熱望の視線は彼女の“一目惚れ”(5) の冒頭であり、その後家を裏切ってテセウスのミノタウロス殺害に助力し、テセウスと共に出航するも無人の海岸に捨てられ、未練を残しつつも嘆き(6)、最後にはテセウスを呪い、バックスと結ばれるまでの一連の行動の発端でもある。

l.101 cupiens

アリアドネの回想中、テセウスが「怪物〔ミノタウロス〕と戦うことを欲する（cupiens contra contendere monstrum (l.101)）」。この欲望は達成され、ミノタウロスは打ち倒される。これはアリアドネの補助を伴ったものであり、同時にアリアドネの家への裏切り(7) へとつながるものである。テセウスはミノタウロスを打ち倒し、アリアドネの協力で迷宮からの脱出を果たし、アリアドネの家への裏切りが決定的となる。

l.145 cupiens、l.147 cupidae

アリアドネの「嘆き」の中で、男性の「欲望する心（cupiens animus (l.145)、欲望の心 cupidae mentis (l.147)）」が2回続けて言及される。

nunc iam nulla viro iuranti femina credat,
nulla viri speret sermones esse fideles:
quis dum aliquid cupiens animus praegestit apisci,
nil metuunt iurare, nihil promittere parcunt:
sed simul ac cupidae mentis satiata libido est,
dicta nihil meminere, nihil periuria curant.

さて、誓いを立てる男を誰しも信用しませんように、
誰しも男の誓いの言葉が信用に値すると望みませんように。
欲望の心が誰かを得ることを望む際に、そのような男らは
誓いを立てるにしりごみせず、約束するに躊躇しないのです。
でも欲望の心の欲求が満たされてしまった途端に、
もはや言葉を覚えてはおらず、偽りの誓いを気にもかけないのです。
（ll.143-148.）

一般的な男性の振る舞いについて述べる形を取っているが、その批難の具体的な対象はテセウスであり、彼によるアリアドネへの裏切りが念頭にある[(8)]。したがってここでの欲望はテセウスのものといえる。その誓いの言葉は「信用に値する／誠実な（fideles (l.144)）」ものではなかった。

l.260 cupiunt

アリアドネによるテセウスとその家族への呪いが成就されて、詩の視点はペレウスの館の新婚のベッドカバーを眺める視線に戻る。そこに描かれているバック

スと信女たちの描写中、不信心ないし未入信の者たちが秘儀を「知ることを欲するもうまくいかない」あるいは「聞くことを欲するも失敗する」(9) と語られる（orgia quae frustra cupiunt audire profani, (l.260)）。

l.267 cupide

ll.265-266でベッドカバーの描写が締めくくられ、ペレウスの結婚式の場面に完全に戻った冒頭、来客であるテッサリア人たちがそのベッドカバーを「熱望して見る（cupide spectando (l.267)）」様が述べられる。彼らはこの鑑賞を「完全に終えて（postquam ... expleta est, (ll.267-268)）」、「聖なる神々に場を譲って退場しはじめた（sanctis coepit decedere divis. l.268）」。ここには英雄時代の人間の敬神に則った秩序が表れているともいえる (10)。

l.374 cupido

祝婚歌中、ペレウス（花婿）とテティス（花嫁）についてパルカエは以下のように歌う。

accipiat coniunx felici foedere divam,
dedatur cupido iam dudum nupta marito.

花婿に幸運なる契約で女神と結ばせよ、
新婦に熱望の夫へとこれより従わしめよ。

（ll.373-374.）

ペレウスは「熱望の夫（cupido ... marito (l.374)）」と表現される。「幸運な契約／祝福された誓い（felici foedere (l.373)）」という表現、またパルカエの祝婚歌全体の祝福からも、婚礼は肯定的に奨励されている。

l.398 cupida

詩人の「結語」[11] 部分、後半部の現代の人間たちの描写の2行目で「そして皆が欲望の心から正義を飛び去らせてしまった（iustitiamque omnes cupida de mente fugarunt, (l.398)）」と述べられる。上記l.374のペレウスの熱望と位置が近いだけに、現代の人間たちのiustitiaが欠落した欲望は、続いて語られる人間の堕落の原因[12] として際立っている。

II. cupidoとiustitia、foedus、fides、pietas

アリアドネの恋はテセウスへのcupidoの視線と共に始まった。このcupidoを成就させるため、彼女はミノタウロスと戦うというcupidoを抱くテセウスに手を貸す。これは彼女の家への裏切りを伴う。そして彼女はテセウスに捨てられ、テセウスを“女性へのcupidoを抱き誓いを立てるも、ことが成るや誓いを忘れて憚らない男性”として批判する。そのような“忘却”[13] 故に彼とその家族が破滅を蒙る[14] ようにというアリアドネの呪いは聞き入れられ、テセウスが無事帰還の印の帆を揚げ忘れたためにその父アエゲウスが死ぬ。このように、アリアドネとテセウスの行動と破滅は、それぞれのcupidoに関連しての裏切り、誓い・約束の不履行によってもたらされている。

この2人に対し、場面がペレウスの結婚式に戻るや、テッサリア人のcupidoと、人間の分をわきまえて神々に場を譲るという彼らの秩序に則った行動が同一文で語られる。その後ペレウスに対し、パルカエが“cupidoの夫”と呼びかける。ペレウスは同時に、祝福されたfoedusを結ばしめられている[15]。

「結語」後半部分冒頭では、cupidoの心からiustitiaが欠落し、現代の人間は堕落していると描かれる。そのため、もはや神々は人間たちを訪れなくなってしまった。この“人間の不幸”の原因としての、iustitiaを欠いたcupidoは、「結語」前半部冒頭の「英雄たちの敬虔な家（domus ... castas heroum (ll.384-385)）」を神々が訪れ、「いまだ敬虔さをないがしろにすることはなかった（nondum spreta pietate solebant (l.386)）」時代の描写といっそう対比的であり、現代における

pietasの欠如もうかがわせる(16)。

以上から、iustitiaやfoedusを伴ったcupidoは責められない、あるいは奨励に値するものであり、その場合cupidoに基づいた行動は成就されているのに対し、iustitiaやfides、pietasを欠いたcupidoに基づいて行動する者は破滅を蒙るというパターンを見い出すことができる。またこのパターンは、詩中のペレウス物語・アリアドネ物語・結語での展開に対応しているといえる(17)。iustitia、foedus、fidesはカトゥルスにおける重要概念であるので、またcupidoは（その「欲望」という意味上当然ながら）何らかの行動を発動する語であるので、64番を読み解く上で両者の連関には注意が払われるべきであろう。

なお、l.260での未入信者たちの秘儀へのcupidoの失敗は上記のようなパターンに当てはめることができなかったが、バックスの秘儀という特殊宗教的性質に関係する可能性を提案しておく。この点について、さらに、本稿で詳細には触れていない64番中のiustitia(18)、foedus(19)、fides(20)、pietas(21)、pius(22) といった語・概念や、「欲望」の同義語、あるいは64番以外でのcupido(23) の用法に注目した分析を進めていくことが今後の課題である。

注

（1） なお、cupidoは神格Cupidoクピドと密接な語であり、カトゥルスにおいても“Cupido Venusque”といった表現が多用されるが、神格Cupidoは64番には見られない。ll.94-98ではウェヌスとクピドが歌われているが、そこでCupidoの語が直接使われていないことは注目に値する。なおラテン語におけるCupido、cupidoとその関連語についてはcf. Ernout (1956), esp. pp.7, 26-27; Krostenko (2001), p.40 n.67, p.42 n.72、語根についてはcf. Krostenko (2001), pp.41-42 n.71。

（2） l.86, cupido; l.101, cupiens; l.145, cupiens; l.147, cupidae; l.260, cupiunt; l.267, cupide; l.374, cupido; l.398, cupida.

（3） fides、foedus、iustitia、pietasに加えてpius、amicitiaなどはカトゥルスにおける重要概念である。これらの概念についてはcf. 中山 (1995), pp.59-73。

（4） 64番の構成についてはcf. Thomson (1961); Quinn (1976), p.298ff.; Traill (1981); Ferguson (1988), pp.34-35; Martin (1992), p.156ff.; Warden (1998), esp. pp.397-399, 406 など。な

お本稿では、物語の展開を把握するのに適しているという理由から、各場面の説明に際しては概ねQuinnに準拠する。Cf. Quinn (1976), esp. pp.298-299.

（5） Quinnはアリアドネの若さと無垢さが現れているll.86-90を、一瞬のうちに起こったこととして“一目惚れ”と評する（Quinn (1976), p.316 ad 64 ll.86-90）。初見で恋に落ちるのはヘレニズム詩によく見られる（cf. Kroll (1959), p.156 ad 64 l.86; Fordyce (1968), p.290 ad 64 l.86; Thomson (1997), p.405 ad 64 l.86ff.）。なお、アリアドネの目は続くll.91-93で「燃える目（flagrantia ... lumina, ll.91-92）」と形容され、炎のイメージに包まれている（cf. Fordyce (1968), p.291 ad 64 l.92; Quinn (1976), pp.316-317 ad 64 ll.91-93, ll.91-92, l.93; Rees (1994), p.78）。とりわけRees (1994)は64番中のlumenの連関に注目している。

（6） 「嘆き（l.132ff.）」の中でアリアドネが、結婚できないのなら家の奴隷として置いてくれるのでもよかったのに（ll.158-163）と極端に己の立場を下げて語る部分に、彼女がまだテセウスへの未練を残していることがうかがえる。

（7） 異父兄弟であるミノタウロスに対して同父母の関係を意味するgermanum（l.150）と誇張して表現しており（cf. Thomson (1997), p.413 ad 64 l.150）、兄妹関係を強調している。なおl.150を中心としたアリアドネの行動とテセウス・ミノタウロスの位置づけについてはcf. DeBrohun (1999), esp. pp.420-421, p.422 n.10, pp.423-424, 429、アエゲウスとの関連についてはcf. DeBrohun (1999), p.426、家との関連についてはcf. Thomson (1961), pp.55-57。

（8） Cf. ll.132-143、とりわけ「甘言の約束の言葉（blanda promissa ... voce (ll.139-140)）」。なお、アリストテレス（*Rh*. 2.21）に依拠して、一般化した叙述は罵詈雑言に適切であるという指摘がある（cf. Thomson (1997), p.412 ad 64 ll.145-6）。

（9） この部分の解釈については、audireとその目的語に相当するorgiaの関係から、議論がある（cf. Kroll (1959), p.177 ad 64 l.259; Fordyce (1961), p.307 ad 64 ll.255-260; Quinn (1976), p.333 ad 64 l.259, l.260; Forsyth (1986), p.398 ad 64 l.259, l.260; Thomson (1997), pp.422-423 ad 64 l.259, l.260; Trappes-Lomax (2007), pp.194-195 ad 64 l.260）。orgiaは通常、「秘匿された儀式（とりわけディオニュソス信仰における）」の意だが、前行（l.259）のorgiaは容器に入れられるなど儀式の特定の場面で使用されている具体的物体であることから、秘儀の象徴的な聖物“mystic emblem”ないし“cult-object”それ自体と解される。l.260のorgiaもしたがって具体的な聖物の意で捉えられるが（たとえば*OLD*, “orgia” b は換喩的表現としてmystic emblemの意味を掲載し、例文の筆頭にl.260を引いている）、l.260でのorgiaは「儀式」の意に変化しているとする見方もある。このことは原則的に聴覚的である動詞audireの解釈と密接な関わりがあり、しかもl.260のorgiaが後代の挿入である可能性も疑われ（Trappes-Lomax (2007),

pp.194-195 ad 64 l.260）、またはこの部分の描写そのものが情景描写よりも音のイメージを重視しているという指摘もあり（Rees (1994), p.83）、それらをいかに分析するかは未入信者たちの具体的振る舞いにも関わる。以上の問題にさしあたっての解答を提出することは困難であるが、この部分のcupidoを厳密に解釈するためには、未入信者たちの振る舞いが重要であり、今後さらなる検討を要する。

（10）　神々は人間たちの間を自由に行き来する（ll.384-386）が、人間たちは神々／重要な来賓に対して場を譲らなければならない（cf. Quinn (1976), p.334 ad 64 ll.267-277）。「場を譲る」decedereには、敬意が含まれている（cf. Fordyce (1961), p.309 ad 64 l.268）。

（11）　なお、この「結語（ll.384-408、前半（ll.384-396）は英雄時代／黄金時代について、後半（ll.397-408）は現代の人間の罪と不幸について）」にはその受け取り方をめぐって議論がある。Cf. 中山 (1995), pp.57-73.

（12）　Cf. Putnam (1982), p.21; Thomson (1997), p.436 ad 64 l.398.

（13）　ll.188-201. Cf. Thomson (1961), esp. pp.52-55; Putnam (1982), p.65ff.

（14）　兄を死なせ家族と切り離されるアリアドネと、父を死なせるテセウスという、共に家に関わる破滅は同種のものである（Thomson (1961), p.56; cf. Putnam (1982), p.60ff.）。

（15）　加えて、64番の特徴として、反対事例を具体的に挙げることでテーゼの内容を明らかにするという手法が指摘されている（中山 (1995), p.73 n.14）。ペレウスの幸福の根拠は作中にあえて描かれない彼のpietasとも考えられる（ibid., pp.64-65, p.73 nn.14-15）。

（16）　なおWardenは人間たちの退場（ll.267-268）と神々の不在（ll.396-397）の対応に、cupidoなどの語の呼応を踏まえて注目する（Warden (1998), pp.405-406）。ただしこの箇所について彼の注意は「不在」に集中しており、「不在」の原因には触れていない。

（17）　Putnamはl.147（一般的男性／テセウスの）cupidae mentisとl.398（現代の）cupida de menteの呼応に注目する（Putnam (1982), pp.55-56, 75-76）。これに加える形で、登場人物の役割から見れば、求愛者としてのテセウス（ll.145, 147）と求婚者としてのペレウス（l.374）のcupidoの対比を指摘したい。なお、結婚者を修飾するcupidusは61番ll.32, 54などにも見られる（cf. Putnam (1982), p.52, p.82 n.19）。

（18）　iustitia及びその関連語・反意語はll.75, 190, 398, 406に見られる。

（19）　foedusはll.335, 373に見られる。

（20）　fides及びその関連語・反意語はll.132, 133, 144, 174, 182, 191, 322に見られる。また、アリアドネの「嘆き」中のテセウスの背信に関わる語についてはcf. DeBrohun (1999),

p.420 n.3。

（21） pietas は l.386 に見られる。

（22） 反意語 impius として ll.403, 404 に見られる。

（23） 61 番、70 番、107 番など。

参考文献

DeBrohun, Jeri B., 1999, "Ariadne and the Whirlwind of Fate: Figures of Confusion in Catullus 64.149-57," in *Classical Philology* vol.94 no.4, pp.419-430.

Ernout, Alfred, 1956, "*Venus, Venia, Cupido*," in *Revue de Philologie, de littérature et d'histoire anciennes* Sér.3 vol.30, pp.7-27.

Ferguson, John, 1988, *Catullus* (*Greece and Rome: New Surveys in the Classics* no.20), Oxford: Clarendon Press.

Fordyce, C. J., 1961, 1968, *Catullus: a Commentary* (repr. from corrected sheets in 1968), Oxford: Clarendon Press.

Forsyth, Phyllis Y., 1986, *The Poems of Catullus: a Teaching Text*, Lanham: University Press of America.

Kroll, Wilhelm, 1922, ... 1959, *Catull*[3], Stuttgart: B. G. Teubner.

Krostenko, Brian A., 2001, *Cicero, Catullus, and the Language of Social Performance*, Chicago: University of Chicago Press.

Martin, Charles, 1992, *Catullus*, New Haven: Yale University Press.

OLD: Glare, P. G. W. (ed.), 1996, *Oxford Latin Dictionary. Repr. with correcions*, Oxford: Clarendon Press.

Putnam, Michael C. J., 1982, *Essays on Latin Lyric, Elegy, and Epic*, Princeton: Princeton University Press.

Quinn, Kenneth, 1970, 1973, 1976, *Catullus: the Poems*[2] (repr. with corrections in 1976), London: Macmillan Education; New York: St. Martin's Press.

Rees, Roger, 1994, "Common Sense in Catullus 64," in *American Journal of Philology* vol.115 no.1, pp.75-88.

Thomson, Douglas F. S., 1961, "Aspects of Unity in Catullus 64," in *The Classical Journal* vol.57 no.2, pp.49-57.

——. 1997, *Catullus: Edited with a Textual and Interpretative Commentary*, Toronto: University of Toronto Press.

Traill, David. A., 1981, "Ring-compsition in Catullus 64," in *The Classical Journal* vol.76 no.3, pp.232-241.

Trappes-Lomax, John M., 2007, *Catullus: a Textual Reappraisal*, Swansea: Classical Press of Wales.

Warden, John, 1998, "Catullus 64: Structure and Meaning," in *The Classical Journal* vol.93 no.4, pp.397-415.

中山恒夫、1995年、『ローマ恋愛詩人の詩論――カトゥルルスとプロペルティウスを中心に――』東海大学出版会（「カトゥルルス第64歌の教訓的結語について」pp. 57-73 = 中山、1967年、「カトゥルス64の教訓的結語（384-408）について」『西洋古典学研究』15、pp.75-85）。

＊　本稿はJSPS科研費［挑戦的萌芽研究］「フィロストラトス『エイコネス』の古代絵画史的研究」（課題番号：24652040）（代表者：羽田康一）の助成による研究成果の一部である。